

設立趣旨と概要

産褥期に精神疾患が発現することは、紀元前のヒポクラテスの記載にも散見されるが、特有な病像の記述が現れたのは19世紀前半、フランスの精神科医 Louis Victor Marcéらによる。その後、近代精神医学の発展と共に、産褥期における精神疾患に関する研究も進展し、この分野では Channi Kumarらによる The Marcé Society（国際学会）が1980年に英国で創設された。

一方、国内でも1987年から「母子精神保健研究会」（世話人 北村俊則ら）が開催された。1992年には旧厚生省心身障害研究（主任研究者 中野仁雄）、1994年からは厚生科学研究班（主任研究者 中野仁雄）の行政面における研究活動が進展した。このような先駆的な研究者を中心として、2003年に日本周産期メンタルヘルス研究会（世話人代表 岡野禎治）を創設し、2014年には日本周産期メンタルヘルス学会へ名称変更し、改組した。

日本周産期メンタルヘルス学会は、診療・研究・教育・行政関係に従事する多職種のもので、周産期メンタルヘルスに関するさまざまな問題を研究する学術団体である。この学会のメンバーは、精神科、産婦人科、心療内科、小児科の医師以外に、助産師、看護師、保健師、臨床心理士、大学研究者など多彩な領域からの人材で構成されている。毎秋開催される学術集会は、精神科学、産婦人科学、看護学（助産、精神看護）の3つの領域からの大会長を選出して、輪番制で開催している。